

「ことばによる傷つき」に関する言語コミュニケーション論的問いの導出

ー心理学的研究のレビューからー

中川佳保(大阪大学大学院生)

1. 導入

本稿の目的は、話し手の発話によってその聞き手が傷つくという現象(以下、「ことばによる傷つき」と表記)について、言語コミュニケーション論においてはどのような問いからその現象に迫れるのかを明らかにすることである。具体的には、心理学における先行研究を概観し、ことばによる傷つきの一種であるモラル・ハラスメントの特徴と照らし合わせることで、問いを導出する。ことばによる傷つきが起こる場面は多岐にわたるが、本稿では、家族や友人、同僚などより親しい人間関係において起こる傷つきに焦点を絞る。

2. 心理学における先行研究

心理学においては、傷つくという感情(hurt feelings)がどのようなものかを知るための一つのアプローチとして、ことばによる傷つきに関する研究が展開されてきた。特に、Vangelisti(1994)が、傷つくという感情を引き起こす要因として発話(message)に注目したことに着目する。

Vangelisti(1994)は、学部生約180人(一回目は179人、二回目は183人)を対象とした二度の質問紙調査を通じて、調査協力者が傷ついたことのある発話を収集した。質問紙調査において、調査協力者は、誰かの発話によって傷ついた状況を出し、その時のやりとりのスクリプトを回答した。スクリプトには、調査協力者が傷ついた発話の前に何が言われたか、傷ついた発話は何のようなものであったか、それに対して調査協力者はどのように反応したかが記述された。さらに、スクリプトの他に、その発話によって傷ついた度合いも調査された。

その結果、収集された発話は、その発話がなにを為しているかという観点から、情報伝達、評価、非難、指示、願望の表明、忠告、冗談、脅し、嘘、疑問の10タイプに類型化された¹。また、何についての発話かに着目してトピックという観点からも分類が行われ、その類型として、恋愛関係(romantic relationship)、友人や家族といった非恋愛関係(nonromantic relationship)、性的振る舞い(sexual behavior)、容姿(physical appearance)、能力や知性(abilities/intelligence)、個人の性格(personality traits)、自尊心(self-worth)、時期(time)、民族や宗教(ethnicity/religion)が挙げられた。

このような類型化に加えて、Vangelisti(1994)は、どのようなタイプおよびトピックの発話が聞き手を傷つける度合いが高かったのかを分析し、その理由を考察している。発話のタイプでは情報伝達が、トピックでは恋愛関係と個人的な性格が、傷ついた度合いが高かった。情報伝達については、非難や評価と違って、相手の言ったことを訂正する余地がほとんどないために傷ついた度合いが高かったのではないかと考察されている。また、恋愛関係についても、相手の面目をつぶさないようにしなければならないため、結果的に相手の言ったことを修正することが難しくなり、より傷つくのではないかと考察されている。

Vangelisti(1994)はさらに、聞き手が傷ついた出来事が話し手と聞き手の人間関係に与える影響について議論している。特に、聞き手が感じた話し手の意図(話し手は聞き手を傷つける意図を持っていたと感じたか)、関係の親密さ、関係の種類(家族か否か)という三つを変数として、それぞれの変数が聞き手と話し手の人間関係に及ぼす影響をいかに左右するか、具体的には、それぞれの変数と対人的な距離の変化(distancing effect)の間どのような相関が見られるかを検討している。質問紙調査の結果、話し手の発話が意図的であったと思われるほど人間関係がより疎遠になっており、関係が親密で

¹ Vangelisti(1994: 61)で示された各類型の発話例は以下の通りである。“You aren’t a priority in my life.”(情報伝達)、“Going out with you was the biggest mistake of my life.”(評価)、“You’re such a hypocrite.”(非難)、“Just leave me alone, why don’t you?”(指示)、“I don’t ever want to have anything to do with you.”(願望の表明)、“Break up with her so you can have some fun.”(忠告)、“The statement was really an ethnic joke against my ethnicity.”(冗談)、“If I find out that you are ever with that person, never come home again.”(脅し)、“The worst part was when he lied about something.”(嘘)、“Why aren’t you over this [a family death] yet?”(疑問)

あるほど、また、家族の方が、人間関係が疎遠になるという影響が小さいということが明らかになった。

以上が Vangelisti(1994)の概要である。Vangelisti(1994)では、①聞き手が傷ついた発話のタイプとトピック、②タイプおよびトピックと傷ついた度合いとの関係、③聞き手が感じた話し手の意図、関係の親密さ、関係の種類という変数と、聞き手がどの程度対人的距離をとったかとの関係、④傷ついた際の反応といったテーマが扱われた。Vangelisti(1994)から、③については、聞き手が感じた意図に焦点を置いた Vangelisti & Young(2000)や、傷ついた度合いと距離の関係に着目した McLaren & Solomon(2008)がさらに考察を発展させている。また、Vangelisti(1994)では質問紙調査で収集するにとどまっていた④についても、Vangelisti & Crumley (1998)が詳細に分析をおこなっている。また、これらの問題を、恋愛関係や家族関係といった特定の人間関係に焦点を絞って調査したものもある(e.g. Feeney, 2005; Vangelisti et al., 2007)。

他に、Vangelisti et al.(2005)は、聞き手が思う傷ついた原因(perceived causes)をテーマとしている。この研究では、二度の質問紙調査を通じて、聞き手が傷ついた原因として、次の8種類の要因が抽出された。その要因とは、自分との関係が軽視されること(relational denigration)、屈辱を受けること(humiliation)、言語的な又は非言語的な攻撃であること(verbal/nonverbal aggression; 聞き手が傷ついた発話の言い方の特徴の問題)、変えることのできない内在的な欠点に対するものであること(intrinsic flaw)、不適切なあるいは悪意が感じられるユーモアであること(ill-conceived humor)、考えを誤解されること(mistaken intent)、失望させられること(discouragement)、ショックを受けさせられること(shock)である。

Vangelisti(2016)は、これまでの研究に不足している点として、次の三つを挙げている。一つ目は、誰かが傷ついている進行中のやりとり(ongoing, situated hurtful interactions)の分析である。特に、傷つきの中でも、一回限りの出来事(isolated hurtful events)と、くり返し起こる出来事(events that occur repeatedly)を区別する必要があるとされている。また、複数の参与者の視点から分析するために二者間あるいはグループ談話のデータを使用する必要があるとも述べられている。二つ目は、傷つくという出来事に関する社会化の過程の分析である。具体的には、子どもや大人がいかに他人を傷つけるようになるのか、また、社会的苦痛(social pain)に対して反応するようになるのかを体系的に調査する必要があるとされている。三つ目は、傷つきを生じさせる上でテクノロジーが果たす役割の分析である。ネット上でのいじめであれ一回きりの侮辱であれ、人がいかに社会的苦痛を解釈するか、またそれに反応するかはメディアに影響を受けると考えられるからである。

ここまでをまとめると、これまでの研究では、①聞き手が傷ついた発話のタイプとトピック、②タイプおよびトピックと傷ついた度合いとの関係、③聞き手が感じた話し手の意図、関係の親密さ、関係の種類という変数と、聞き手がどの程度対人的距離をとったかとの関係、④傷ついた際の反応、⑤聞き手が思う傷ついた原因といったテーマが扱われてきているといえる。また、指摘されている不足点として、誰かが傷ついている実際のやりとりの分析、一回限りの出来事とくり返し起こる出来事の区別、傷つきに関する社会化の分析、テクノロジーの役割の分析がある。

3. モラル・ハラスメント

前章では心理学における先行研究を概観したが、ここで、イルゴイエンヌ(1999)をみてみよう。これは、臨床医である著者が、家庭と職場で起こるモラル・ハラスメントの実例を挙げながら、その進行の段階や加害者の戦略、加害者や被害者の行動心理を分析したものである。イルゴイエンヌ(1999)によると、モラル・ハラスメントにおいてはことばによる攻撃が主流である。このことから、モラル・ハラスメントにおいてもことばによる傷つきが起きていると考えられる。そこで本章では、イルゴイエンヌ(1999)を参考にモラル・ハラスメントという観点からことばによる傷つきの特徴を考察する。

その前に、モラル・ハラスメントそのものについて、簡単に説明しておく。モラル・ハラスメントとは、精神的な暴力のことであり、それを通じて「ある人間が別の人間を深く傷つけ、心理的に破壊してしまう」(イルゴイエンヌ, 1999, p.17)ようなもののことである。モラル・ハラスメントは、その加害者と被害者の関係の変化を基軸に、支配の段階と暴力の段階という、二つの段階にわけられる。支配の段階では、加害者が被害者を惹きつけ、つまり、加害者から離れられないようにし、精神的に不安定にさせ、徐々に自信を失わせていき、被害者の考えや行動をコントロールしていく。この段階では、ちょっとした嫌味や皮肉、ほめかしや、相手を拒否するような口調が用いられる。被害者が加害者の支配に気づいて反抗するようになると、暴力の段階が始まる。この段階では、侮辱や嘲弄、中傷や悪口、罵倒などが用いられる。

このように、モラル・ハラスメントでは、いずれの段階においてもことばが主な暴力の手段となっている²。このようなことばがもつ暴力性には、次の二つの特徴がある。

一つ目は、ひとつひとつのことばは取るに足らないものであり、その暴力性が加害者と被害者にしかわからないというコンテキスト依存性である。このことは、イルゴイエンヌの、「加害者の攻撃は巧妙で、ひとつひとつのことをとってみ

² 支配の段階と暴力の段階の間では、攻撃の仕方は重複している。支配の段階と暴力の段階の違いは、前者においては被害者を支配することが目的となっているのに対して、後者においては被害者の精神を攻撃することが目的となっているという点にある。

れば<暴力>だとは言えない」(同上, p.35), 「加害者の口から被害者の精神を動揺させるようなことがほめかされても, それ自体は取るに足らないことで, また背景の事情を知らないため, 周りの人間にはそれがどれほど被害者を傷つけているかわからない」(同上, p.165), 「被害者を攻撃するのに, 加害者はよく悪意のほめかしを使うが, これは本人たちにしか分らないものが多い」(同上, p.202)といった記述にあらわれている。

例として, ある夫婦間でおきたモラル・ハラスメントでなされた, 以下のやりとりをみてみよう(同上, p.52; 53). この事例では, 夫のポールがモラル・ハラスメントの加害者, 妻のアンナが被害者である。

- (1) 夫婦で参加したパーティで, ポールが友達をつかまえて「知ってるかい? アンナは古くさい音楽ばかり聞いているんだぜ」, 「アンナはこんなことも知らないんだぜ. そんな常識だっていうのに……」などと言う。
- (2) 友達と一緒に夫婦で週末旅行に出かけた時, みんなの前でポールが「すごい荷物だろ? アンナはぼくのことを引越し屋だと思ってるんだ. 浴槽を持ってこなかったのが不思議なくらいだ」と言った. アンナが「いいじゃないの. 私のスーツケースは私が持って歩くんだから……」と反論すると, ポールは「そうだよ. でも, きみが疲れたりしたら, ぼくはおつきの者のようにそいつを持って歩かなくちゃならないんだぜ」と言った。

このようなポールのことばに対して, アンナは, ポールが自分を攻撃していると感じた一方で, ポールのことばは冗談としても受け取ることができるもので, 周りにいる人たちもそれを悪意の言葉だと思っていないようだ, とも感じている。また, (1)や(2)のようなアンナを嘲弄するやりとりは, 特に人前でアンナが返事をできないような状況を選んで行われ, あとでアンナがそのことを話題にしようとする, そんな小さなことで騒ぎ立てるなんてきみは恨みがましいと非難されると証言されている。

(1)や(2)では, ポールのことばはアンナにしか暴力性をもっておらず, 周りにいる人間にはそれが伝わっていない。冗談としても受け取ることができるポールの言葉にアンナだけが暴力性を感じたのは, (1)や(2)までになされてきた, 例えばあとで非難されるといったやりとりや, それによって形成されてきたポールとアンナの間の支配関係があるからであると考えられる。すなわち, アンナとポール以外の人間は知らない, アンナとポールの関係というコンテクストに依存して, ポールの言葉がアンナにとって暴力性のあるものになったのである。

ここで, 二つ目の特徴があらわれる。それは, ひとつひとつのことばは取るに足らないものでありながら, それらが繰り返されることで, ひとつひとつのことばが暴力性をもつものになる, また, それらが全体としてまとまりを持ったひとつの暴力になるという累積性である³。イルゴイエンスによれば, 「ひとつひとつの言葉をとってみれば, それほど暴力的であるとは言えない。だが, そういった言葉が繰り返し言われることで, 一つの暴力を形づくっていく」(同上, p.201)。アンナとポールの例でいえば, (1)や(2)だけをみれば, 個々のことばは単なる冗談ともとれるもので, その暴力性は明らかではない。しかしながら, (1)や(2)のようなやりとりが繰り返されてきたことで, (1)や(2)におけるポールのことばもアンナにとっては暴力性のあるものになっている。また, そのようなやりとりが繰り返されることによって, アンナは, 最終的にポールと離婚し, 精神科を訪れるようになるほどに, 精神が破壊されるという暴力を被っている。

ここまで, モラル・ハラスメントにおけることばの攻撃がもつ暴力性には, 加害者と被害者にしかわからないコンテクスト依存性, それまでに繰り返されてきたやりとりをへて生まれるという累積性の二つの特徴があるということを見てきた。このことから示唆されることはなにか, 前章でみた先行研究と照らし合わせながら次章で考察する。

4. 問いの導出

前章の内容を踏まえると, 2章でみた先行研究に対して, 次の二つの点が指摘できる。

一つ目は, ことばによる傷つきは必ずしも一回限りのやりとりで完了するわけではないという点である。既述の通り, イルゴイエンス(1999)からは, モラル・ハラスメントにおけることばの攻撃がもつ暴力性には, コンテクスト依存性, 累積性という二つの特徴があることが明らかになった。これを踏まえて2章でみた先行研究を振り返ると, 先行研究では, ある一回のことば, つまり, 一つの発話による傷つきしか扱われていないことがわかる。これは, Vangelisti(1994)において聞き手が傷ついた発話の例が一文単位で示されていることや, 質問紙調査で回答を求められている出来事が一つだけであることにあらわれている。

しかしながら, Vangelisti(2016)が一回限りの出来事とくり返し起こる出来事を区別する必要があると指摘している通り,

³ モラル・ハラスメントにおける攻撃には, 進行するにつれて徐々に暴力性が上がるという特徴もあるが, ここでいう累積性はそれとは別である。

ことばによる傷つきは必ずしも一つの発話による一回限りの出来事であるとは限らない。さらに、3章でみた累積性という特徴を踏まえると、モラル・ハラスメントにかぎらず、複数の出来事が重なって一つの傷つきを生むという可能性も考えられる。

二点目は、分析の射程に関する問題である。先行研究で扱われていたテーマは、聞き手が傷ついた発話のタイプやトピック、傷ついた度合い、聞き手と話し手の人間関係、傷ついた原因、傷ついた際の反応といった、傷ついた時点における事柄や、傷ついた後どの程度話し手と対人的距離をとったかといった傷ついた後の事柄であった。しかしながら、イルゴイエヌ(1999)からは、聞き手を傷つけたことばの暴力性は、それまでに参与者間で起きたやりとりやそれによって形成された参与者間の関係といった、ことばによる傷つきが起こるまでの要素に起因するものであることがわかった。すなわち、2章でみた先行研究では、Vangelisti(2016)が社会化の問題について言及しているものの、ことばによる傷つきが起こるまでのやりとりを見落としていることになる。

以上の二点を踏まえると、ことばによる傷つきの研究について、聞き手が傷ついた発話がなされた単一のやりとりだけではなく、また、聞き手が傷ついたやりとりを単一のものに限定することなく、それまでに起きたやりとりを考慮する必要があるといえる。

では、それまでに起きたやりとりをみることで明らかにできることはなにか。それは、聞き手を傷つけたことばがいかにその暴力性をもつようになるのか、聞き手を傷つけるものになるのかという問題である。先行研究で考慮された要素に加えて、ことばによる傷つきが起こるまでになされたやりとりを分析の射程に入れることによって、いかなるコンテキストをもって、あることばが聞き手を傷つけるものになったのかを追究できるようになる。これは、複数のやりとりの関係や、使用された言語的あるいは非言語的記号とそれを取り巻くコンテキストとの関係を分析することが求められるという点で、言語コミュニケーション論において取り組まれうる問題であろう。

参考文献

- Feeney, J. A. (2005). Hurt feelings in couple relationships: Exploring the role of attachment and perceptions of personal injury. *Personal Relationships*, 12, 253-271.
- イルゴイエヌ, M. (高野優訳) (1999). 『モラル・ハラスメント—人を傷つけずにはいられない』 東京: 紀伊国屋書店.
- (Hirigoyen, M. (1998). *Le harcèlement moral: La violence perverse au quotidien*. Paris: La Découverte)
- McLaren, R. M., & Solomon, D. H. (2008). Appraisals and distancing responses to hurtful messages. *Communication Research*, 35, 339-357.
- Vangelisti, L. A. (1994). Messages that hurt. In W. R. Cupach & B. H. Spitzberg (Eds.), *The dark side of interpersonal communication* (1st ed.) (pp. 53-82). New Jersey; London: Lawrence Erlbaum.
- Vangelisti, L. A. (2001). Making sense of hurtful interactions in close relationships: When hurt feelings create distance. In V. L. Manusov & J. H. Harvey (Eds.), *Attribution, Communication Behavior, and Close Relationships* (pp. 38-58). New York: Cambridge University Press.
- Vangelisti, L. A. (2016). Hurtful communication. In C. R. Berger & M. E. Roloff (Eds.), *International encyclopedia of interpersonal communication*. New York: Wiley Blackwell.
- Vangelisti, L. A., & Crumley, P. L. (1998). Reactions to messages that hurt: The influence of relational contexts. *Communications Monographs*, 65(3), 173-196.
- Vangelisti, L. A., Maguire, C. K., Alexander, L. A., & Clark, G. (2007). Hurtful family environments: Links with individual, relationship, and perceptual variables. *Communication Monographs*, 74, 357-385.
- Vangelisti, L. A., & Young, S. L. (2000). When words hurt: The effects of perceived intentionality on interpersonal relationships. *Journal of Social and Personal Relationships*, 17, 393-424.
- Vangelisti, L. A., Young, S. L., Carpenter, K., & Alexander, A. L. (2005). Why does it hurt?: The perceived causes of hurt feelings. *Communication Research*, 32, 443-477.